松浦佐用媛石魂録

前編

三

止

6-60003
図986A
3-3

佐賀県立図書館
平成
6.10.31

南川藏書

松浦佐用嫗石魂録前編下巻

東都　曲亭馬琴編次

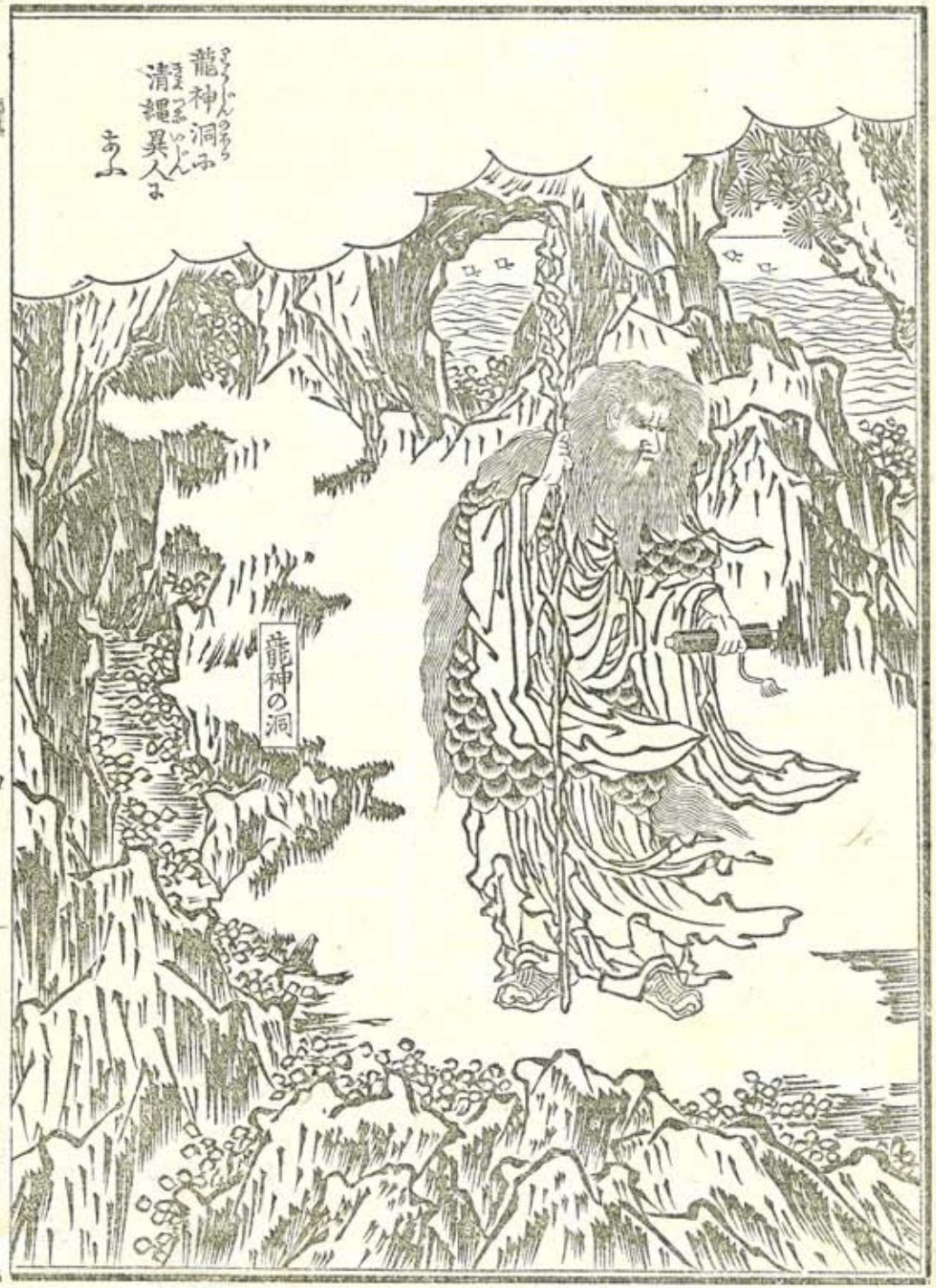
第九　龍神洞に孤客命を知る

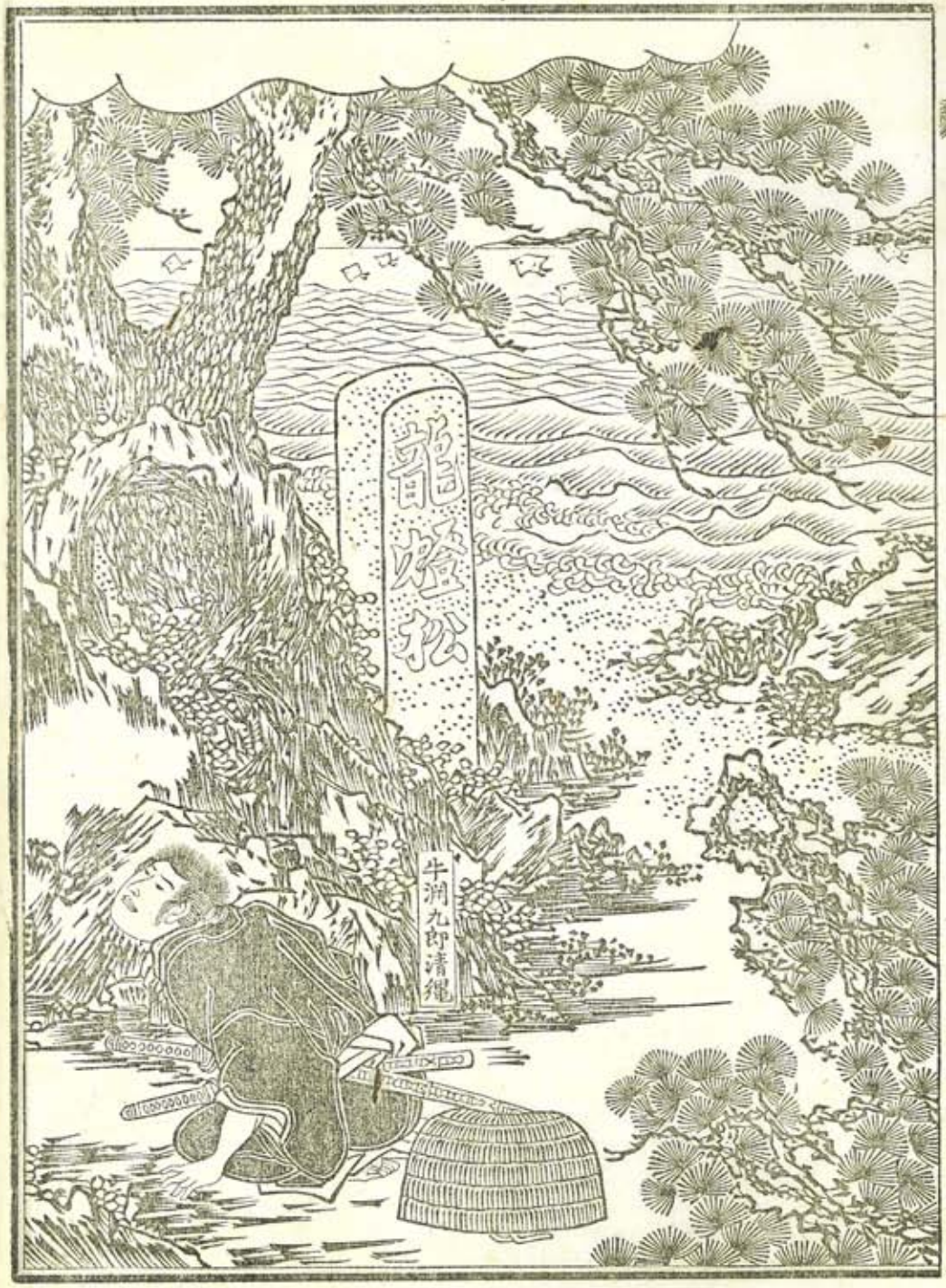
太宰府の守護。平經高が股肱の家隷に。牛淵九郎清繩と云ものありけり。原是何等の人なりと。其素姓を尋ぬるに。父は岬平馬清廉とて。三浦泰村が譜代の郎黨。忠義無二の者なりし。然るに泰村は。後深艸帝の御宇。寶治の始め。北條一家の威權を猖ミ。謀反の企ありしころ。清廉屢々主を諫く。終に用ひられず。却出仕を留められしかば。平馬は痛くこれを歎き。忠臣面を犯して。君を諫るに。其言用ひられず。縱眼睛を東門に掛るとも。又何の益らあらん。只身を殺して。君がミづからなせる禍を禳ひ除んゐは。と深念し。一封の遺書を寫留め。腹かき切て死にけり。清廉が死後に。彼遺書を披露をと雖も。泰村終に逆意を思ひ留まる氣色なし。あらはれ。其鯁忠を憐みけん。清廉が幼さりの子どもを扶助し。恩惠頗厚かり

けて。さる程に寶治元年六月五日。泰村俄頃に親族に令令。軍兵を召集。執權時頼朝臣の宿所へ押寄く。勝負と一時に決せん。と計較々るが。緯忽地に發覺て。その日の軍利あらず。泰村父子主從。辛ぐて法華堂に引退。皆悉く自殺せり。かゝりしゝば。岬平馬清顧が子供冢子に女兒に。次男と淵九郎といふ。年おほ幼。母を去年の秋身まかり。父を此春自殺おく。よるべなき孤おるに。主家さへ滅亡しつ。謀反人に餘類おりと。日来親しき方も疎き。いとゞ詮術なかりしかば。同肥泣々鎌倉を迷ひ出。些の由緣と便りて。攝州尼が崎に赴き。浦人の奴婢とおりて。形おの世と送りけゝ。こゝふあること十年あまり。艱難愛苦の中に人とおりけるが。淵九郎に雅より其志遥しく。潛に思ふやう。己が身命運薄くおく浮世と抉ゝ斯民間に零落して。人の奴僕とおり。紅人等に撩役せらるゝと雖も。父に泰村ぬしに忠臣たり。加旃三浦岬に元親族よしく。外様の家隷と同じからず。されば己れいかにもして鎌倉と攻滅し。亡君の仇讐報にゞや。と思ひ定めおがら。姉に心中の機密をおらせゞ。ある日同肥。人おの居に集合て。行末采しかゝの事を語りけゝくる序に。淵九郎が云やう。姉御に年も。己れふに十あまり増くおにをれば。昔鎌倉ふありける日に景迹も。とさ〳〵記てゞおにをらめ。己が身に何事も夢のやうふく。父母の面かげさへ。定らふに認り候に。さしも三浦の忠臣と呼ぎさる人の子とし〳〵。汐風ふ吹く浴まれ。徒ふ浦曲の捧と事として。生涯と過さんに。最朽とし。西國に。菊池原田なんどゝて。名だゝる武士も多ければ。同肥諸共に。彼地ふ赴。緣ともとめく主どりせばやと思ふおり。思ひさち給へらしと云ふ。姉も年来淵九郎が志大ふして。ものゝ用にさつべき者なりと見くければ。ともかくも。よ。孤ふ計らひ給へと應しかば。淵九郎大孤ふ歡び。主人に。故郷へ立歸り。親族に對面して父母の墓へ詣で後ふ。又歸て来べきよしといひおしらへ。おむし身の暇と給ゐるべしと云ふ。主人聞く。彼等に年来信やうに仕さるものおれば。とて。心よく是を放し。東へに道もえるけし。是もてゆ孤ねとて。路費よ孤程にとらするふゞ。同肥いよゝ歡び聞えく。遂ふ尼が崎を旅ぢち。東へに赴ずして。只顧西と斥てゆく程に。日と經く。長門なる赤間が関まで来にけて。さて此津より。便船おく。豐前の小倉へ渡らんとしける夕。忽地姉と見失ひく。大きに驚

紀。彼此と索めぐりて。其日ハ遂ヨ船ヨ乗らず。次の日も。又浦曲ふ泊て。竹崎室津。畑住。新五。宇加瀧口。神田。阿川の湊々と索呻吟。是首彼首まて。二三日を費もと雖も。絶〻姉に環會ず。こゝに至〻淵九郎ハ。大ヨ後悔し。已れ不幸ふして。むやく父母を喪ひ。姉の養育を受〻。其恩父母ふ異ならず。あらると。青雲の志已難くて。遠く西海に漂流し。思ひの外に同胞離散して。姉の往方と知ず。かゝれば再會も又計難し。縱一旦志と得〻蘇張が列國の印と帶るの日ありとも。姉の高恩と謝もる事と得ずば。益な紀ヨ似さり。よしなやふ。住おれさる津國と。漫に迷ひ出さればこそ。亦一層の憂苦とませ。只此上ハ。神明佛陀の冥助と禱るに非ずば。姉の往方と知難らるべしと〻。此日より道。次ふさゝし給ふ大小の神社へハ。必らず詣で祈念を凝らしつゝ。隈川のあるさ向と云所ハ。長やらに海へさし臨たる出崎なり。此ヨさりに。龍神の洞と云あり。又龍燈の松とて。最盛りたる松ありけヨ。渡海の船も。風濤の難ふあふ時ハ。かの洞ふ禱ヨに。必らず應驗あるよし。浦人の物語ヨと。淵九郎不圖聞〻。應〻件の洞ヨ參詣し。祈願もる事前の如く。殊更に丹誠と凝らしけるに。頃しも三月の下旬ふ

れば。海上日和ふづらふして。風景えもいハれず。長途の疲勞に。思ハぎも。彼龍燈の松が株と枕として。ふべし目瞬さる枕邊に人ありて。淵九郎〻〻と呼び覺を聲せしらば。やとろ頭と擡ハ〻見らへれば。白髮童顔の翁。端然とし〻。傍な巨巖ヨ尻とかけてあり。被さる衣ハ海松の如くかき垂されど。其文を。未ざ見も馴ざる錦綺の類ヨや。光曜くと。魚の鱗め紀さるヨ。手ヨもさる杖ハ。朱よりも赤くて。珊瑚ふ彷彿さり。淵九郎深く怪しみ。この翁ハ。凡人ならじと思ひしらば。岸破と身と起して其ほとりヨ蹲踞しつ。翁ハ。熟と淵九郎と視〻云やう。壯佼。汝ハ。志大いなれども。惜らくハ。命運甚薄し。ゑし志を轉し〻。名利と素泥中ヨ尾と曳んヨハ。齡百歳の上壽と保ち。人の爲ヨ尊敬せらるべし。又宿志と轉し得ず し〻。頻ヨ暴慢と放ヨし。名利兩路がら懸念せば。其事成ざるのミならで。年四十と越難かちん。とまれかくまれ。今より廿年と經〻。始めて姉ヨあふ時あり。已れ見る所あるとも。汝ヨ一巻の秘書を傳授すべし。汝が才ともく。熟讀ば。天文地理。卜筮說相ハ更なり。兵家の大事を開悟し。又閫鍵の奇術伎得つべ紀ぞり。只其業成就もと雖も。これと用る所ふし。僅ヨ


龍神洞ハ
清繩異人ヨ
ア
龍神の洞


牛淵九郎清繩

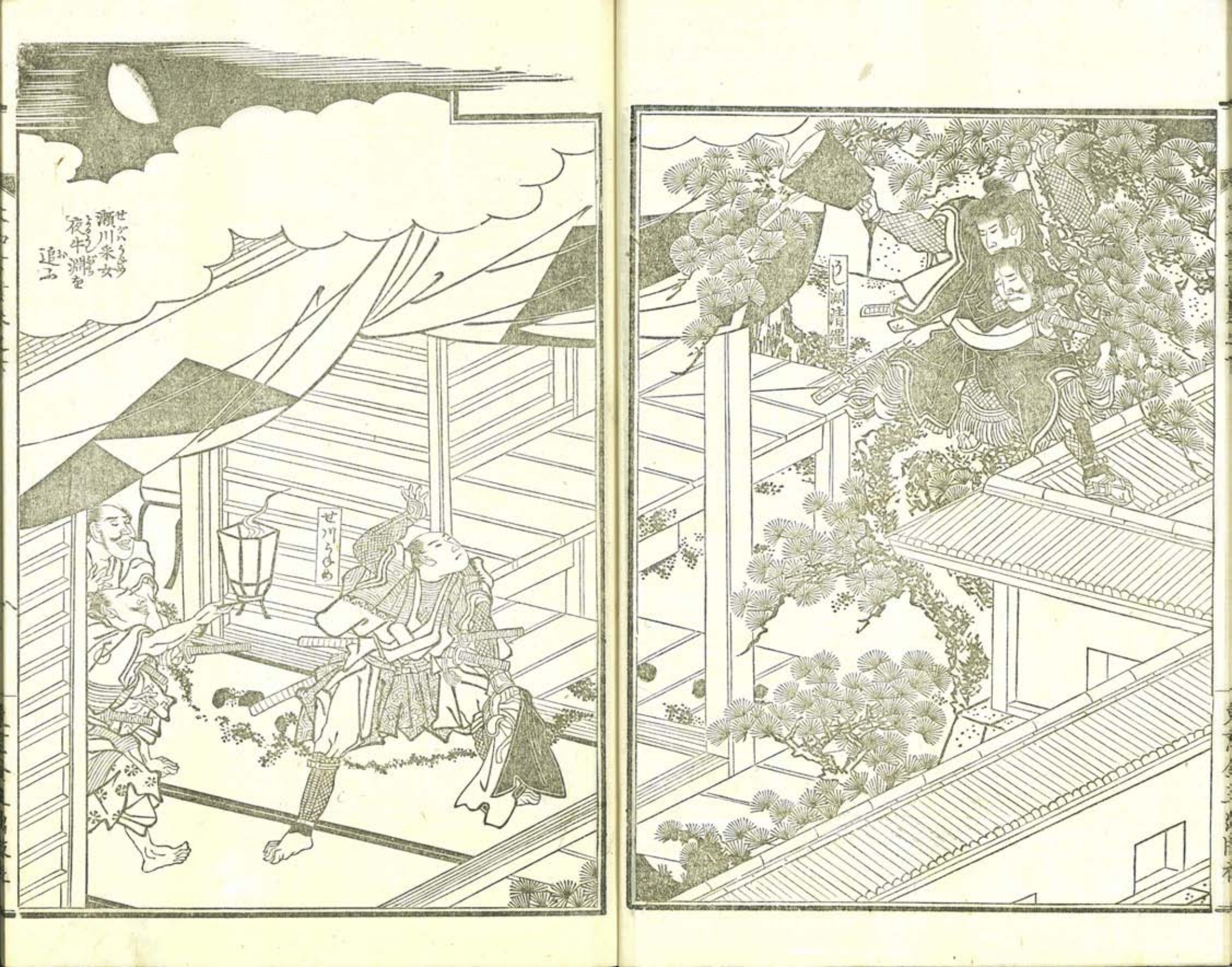
賣卜して。一己の口と餬ふに足るのミ。強く其術を放〜て。夙志を遂んと致す時ハ。身を亡をも又其術ゝあり。努思ひ慎く。己が教ゝ恃おせが。と說示し。懸て懷より。一卷の秘書ととり出く通與せしかバ。淵九郎深く歡びて。數回押戴て。其計らずも。かゝる賜と受候ゝ。おでう等閑ゝ思ひ候べ。願くハ己が師。明白ゝ名氏を示し給へゝ〜と云ゝ翁。微笑て。己れハ名もなく家もおし。汝が先祖ゝ因あるとも。言こゝに及ぶのミ。といひも終らず。白汝高く嚴と洗ふて。發と群さつ水鳥と共に。翁ハ忽地金光と放ち。打うへを浪と踏で。往方も知れぬなりに。夕ゝ淵九郎ハ怪然と。ぼむ〜其方と目送つゝ。己れゝもあらで。ついぬさる。時ゝ海上浪おさまりて。夕陽西ゝ沒んとに。其時淵九郎ハ。小膝を礙と拍げゝ思ひ出せ〜ことおそあれ。己が曾祖ハ。三浦介義明の庶子なりしが。其母、ある日。岬の磯邊ゝ遊ぶく。感ずる事あり。終ゝ有身て。産さる子の腋下に鱗ありしゝバ。是必ず龍神の子ならんとて。岬龍神と名づけさるよし。姉の物語ゝてきりぬ。然るゝ彼翁其名と問れく。汝が先祖ゝ因ありと答さるハ。疑ふべくもあらぬ。龍神なり。己れゝく向後の吉凶と示され。いよ〜命運の薄紀を知りながら。おゐ大事と思ひ企るとも。頼もしからず。已なん〜とひとりごちて。遂に夙志を轉し。只世狀安らに送らんと思案〜つ。直に九州ゝ遊歷おて。潛ゝ件の秘書を熟讀〜。やゝ發明をる所ありて。天文地理。卜筮說相。軍學の奥旨。間諜の奇術をよくにと雖も。龍神の教と守りて。一さびもその術と施さず。ゆ紀〜て。筑紫の太宰府ゝ到る。岬淵九郎を更て。牛淵九郎清繩と名告り。賣卜して生活とをるゐ。其卜所。露バらりも違ざりしかば。諸人深く尊信〜て。今の世れ指の神子なりと稱讃を。然れども清繩ハ。謝儀を受ること僅ゝ十錢と定めて。其餘を貪らず。只管清貧を樂ミゝ。こゝにある事廿年に及ぶ〜が。太宰の經高謀反の企あるゝよりて。をべて一藝ある者と扶持をるゝ。清繩が事とよく知りて。頻ゝ是と招けども。牛淵九郎ハ深く推辭て。招紀ゝ應ぜざるを。經高おゐ禮儀と厚くして。其使節三度ゐ及びしかバ。牛淵九郎脫るゝに言語おく。とさまかうさま思ひさゆさひ〜が。年來筑紫ゝありて。世渡をなるゐ。威德ある人ゐ招れて。一度も行ゝ。これと謝せずバ。却失敬の罪と責らるべ〜と思ひて。遂て城中に赴き。經高が老臣ゝ就て。日來の恩惠淺らざるよ

ーを聞へあぐるに。經高ハ。牛淵九郎が来れり。と聞て大に歡び。ヨリ出く城中ヨ留る事三日。さま〳〵ふ餐應さー。老臣更る〳〵に。利害を說。まげて守護の渴望に應ゞ給へ。斯てもおほ推辭給ハゞ。生涯此城中より外へ。出さゞと云ヨ。清繩ハ斯叮寧なるに心よハく覺〳〵。已をと得ず。おぶ〳〵ヨ。主君と頼ミ奉るべーと應々り。さる程ヨ經高ハ。牛淵を後廳ヨ呼び入き〳〵對面ー。見參の引出物とーて。鎧一領太刀一振。鞍おきさる馬一疋を賜て。てづゝ盃とあげ。餐應初めに彌增さり。其時清繩ハ。はく〳〵と經高ハ相をるふ。謀反の氣あらハれ〳〵おゝも事と遂べき人ヨあらざれば。意の中大に驚紀。只管後悔おさりーゝど既ヨ其招紀に應ゞて。言下に是を違背せば。忽地ヨ罪せらるゝのミおらず。死後おほ胡應なるべーとれ思ハずも。范增と恨と等くをる事よ。と嗟嘆ー て。命運の係る所。今ハかうと思ひ諦め。遂ヨ志と傾〳〵。仕ーが。經高果おゝ。いく程もなく謀反と起ー。清繩をもて軍師とを。されば清繩ハ。機ヨ臨變ヨ應ゞ。屢々謀と述るヨ。經高ハ。其人となり。識量挾く。人ハ疑〳〵決斷なゝれば。其謀を用ひず。清繩大ヨ焦燥て。手勢僅ヨ二三百人と將て。肥後國ヨ押渡り。菊池原田と攻

靡ー。肥前の飛龍渡ふ色ー て。勢やゝ九州ふ振へり。然るふ。北條上總介實政。執權時宗朝臣の命と稟て。鎭倉と進發ー。船路より肥前國ふ赴きゝ。矢田の津に陣ゞ布。直に清繩を討んとを。清繩緣由と聞て。實政の軍配。侮難く思ひーかば。俄々おく進ミ戰ゞ。兩陣巨海を隔つゝ。疾視あふて徒に日と過ー。むや其年も暮て。新玉の春立ゝへりヨけれど。寒さ呀まさりて。雪降續紀されば。敵も身方も最徒然ふ堪ゞ。此時瀨川采女吉次ハ。大將實政ヨ密語ていへりゝるハ。灰閑牛淵九郎清繩ハ。不測ヨ間諜の術と得さりとおん。彼去年より一たびも寄せ来ざるハ。必定別に謀ある歟るべー。常言に。笆外の犬ハおほ防べー。壁隙の風ハ禦がさーといへり。牛淵倘潛入ゝ不虞の事あらば。臍と噬とも及むゞ。大將ふハ。今宵より其と臥房と換ゝ賜給へゝー。幸ヨ子密が便室の禍を脫ミ給ふべ紀ものをと。信ざちていふ。實政聞ておべー尋思ー。示さるゝ所理あれど。初め俑をはくるものをゝ。おほ不仁おりといハゞゞ。然るをわが身の厄難と避んとて。人と危紀ヨ代を彭事ハ。勇士のせざる所なり。と回荅て。承引氣色おゝりーかば。吉次重ゞて。然らば近曾陣中に。罪ある者の死刑ハ放ー。是

ともてかゐらし給へ。かくする時ゐ。其人牛淵が爲ゐ命を隕さるゝとも。恨ゐらるべし。もし幸ゐして。敵の刃と脫なば。九死と出て一生と得。おがく自の罪と贖ゐ足おん。まげてゑらし計らゐし給へらしと云ゐ。實政やうやく諾ゐひて。近習令と犯して。其罪。死ゐ當る者の年紀貌粗大將ゐ貧たるを擇ゑ出して。其罪と放し。密やうゐ綽の趣とゑらするゐ。其もの歌で命と稟。毎夜ゐ大將ゐ代て。其臥房ゐ瞻りつ。吉次又壯士二三十人を。帷幕の中ゐ伏て牛淵もし忍び入らば。引裂て討取べきよしを聞え知し。其身ゐ出居の方。少し引入さる處ゐ直寢して。通宵瞻らず。實政又士卒ゐ下知して。毎夜ゐ箭を焚し。ミづらら四隅とうち巡りて。用心極て堅固なり。さる程ゐ牛淵九郎清繩ゐ。去年より飛鼯渡ゐありゐがら。實政の大軍ゐ比ゑば。ゐが衆ゐ十が二三ゐて。勢ひ當り難く覺しらば。敵の寄ざるを僥倖ゐして。一さびも動らぢ。つく〳〵と思ふやう。ゐれ其始め。經高ゐ聽されて龍神の教誡ゐ悖。遂ゐ五斗米の爲ゐ腰を折るのミおらぢ。此度の大事ゐ與りて。百戰百勝の奇計を述るゐ。經高暗愚ゐして絶て用ひぢ。ゐれゐ彼人譜代恩顧ゐ家隷ゐもあらねど。とてもかくても死をべ死身なり。せめて北

條の親族さる實政と擊とつて。古主泰村朝臣の寃魂を慰め奉らば。初免の志を遂るゐ庶し。且經高ぬしの謀反と起せしを懲なり。ゐが實政と擊ゐ義おり。所詮廣場の戰せば。寡をもて衆ゐ敵し難し。只夜ゐ紛き〳〵潛入り。實政が首を引提て。走り歸らん者とと。深念し。腹心の兵士に機密と聞え知して。陣中を守らし。頃しも正月廿八日の烏夜ゐ。第まつ雪乃降らゐ。清繩ゐ最身輕く打扮て。只一人小舟ゐうち乘り。矢田乃湊ゐおし渡りて。小夜深る比及ゐ實政乃陣ゐ潛寄れば。雪ゐまを〳〵降る程ゐ。番次乃兵士も。おのづらら懈りて。所々ゐ集合つゝ。最ゑめやうゐうち相語舞乃ゑを。清繩を元來間諜乃術ゐ長されば。鹿垣と跳躍。轅門を過りて。輙く與深く忍び入りつゝ。遂ゐ大將實政乃臥房ゐ到り。忽地ゐ其首とか死落し〳〵。頭髻かい飆て走り出るゐ。帷幕乃中なる壯士も。頻ゐ瞻を催して是と知ず。只瀨川吉次乃ミ。瞻魔を退け。孤燈乃下ゐ。史記乃刺客傳と閲して居さりけるゐ。忽此癖者ありて。假實政乃首拔引提。外面へ走り去ると。吉次佶と見て。をゐや牛淵ござなれ。と叫びもあへず。暮直ゐ飛らゝりて。盃子鐵入たる頭巾乃紐を。無手とりて引らへさんとをるゐ。豫て忍緒と放お


瀬川采女
夜牛淵を
追ふ
せ川うめ
巳淵清滝

紀さるまや仰さはふ引外して頭巾を吉次が手ふ殘り清繩ねむや鹿垣ふ走り登きば吉次大ふ焦燥て太刀ふ著さる小刀を脫出し追ひつゝ丁と打かくると清繩を物どもせぎして是と袖ふ受留やとら垣を踏こえて脫ぎ出さり。こ乃胼磐ふ宿寢乃壯士番次乃兵士驚紀驟て手ふ〳〵器械をとつく追蒐んと聞くと吉次見らへりて牛淵とバ。ゐれ追留て擊とるべし。おの〳〵はむやく路を斷ふさぎて遠奴狄飛鼠渡へ歸さぎ拒やうに手配ふ給へといひうけて角門と押開紀飛が如くに追くゆく大將實政緣由を聞て驚て謀つる事なれバ。俄頃ふ軍兵狄三手にゐけ其一手ね清繩が歸るべ紀路と遮り留さし又一手の兵士ね殘し留めて陣中と守らし殘る一手の軍兵と將〳〵直に飛鼠渡へ押ゐさり清繩が陣を攻破り其色を拔んとて馬ゐ閃りとうち跨鞭狄鳴らし深雪と踏し拂ふ掃て走出きバ主に劣らぬ壯士ども。ミな後きゞと引添たり斯て瀨川采女吉次ね頻りに牛淵清繩と追蒐く。やゝ間近くなる程に牛淵ね蹤林の中へ走り入りて忽地見へず成りしらば吉次まを〳〵焦燥く雪に印さる足迹を禁ふし。おほ何處までもと追蒐たり。さても牛淵九郎清繩ね輙く實政と擊

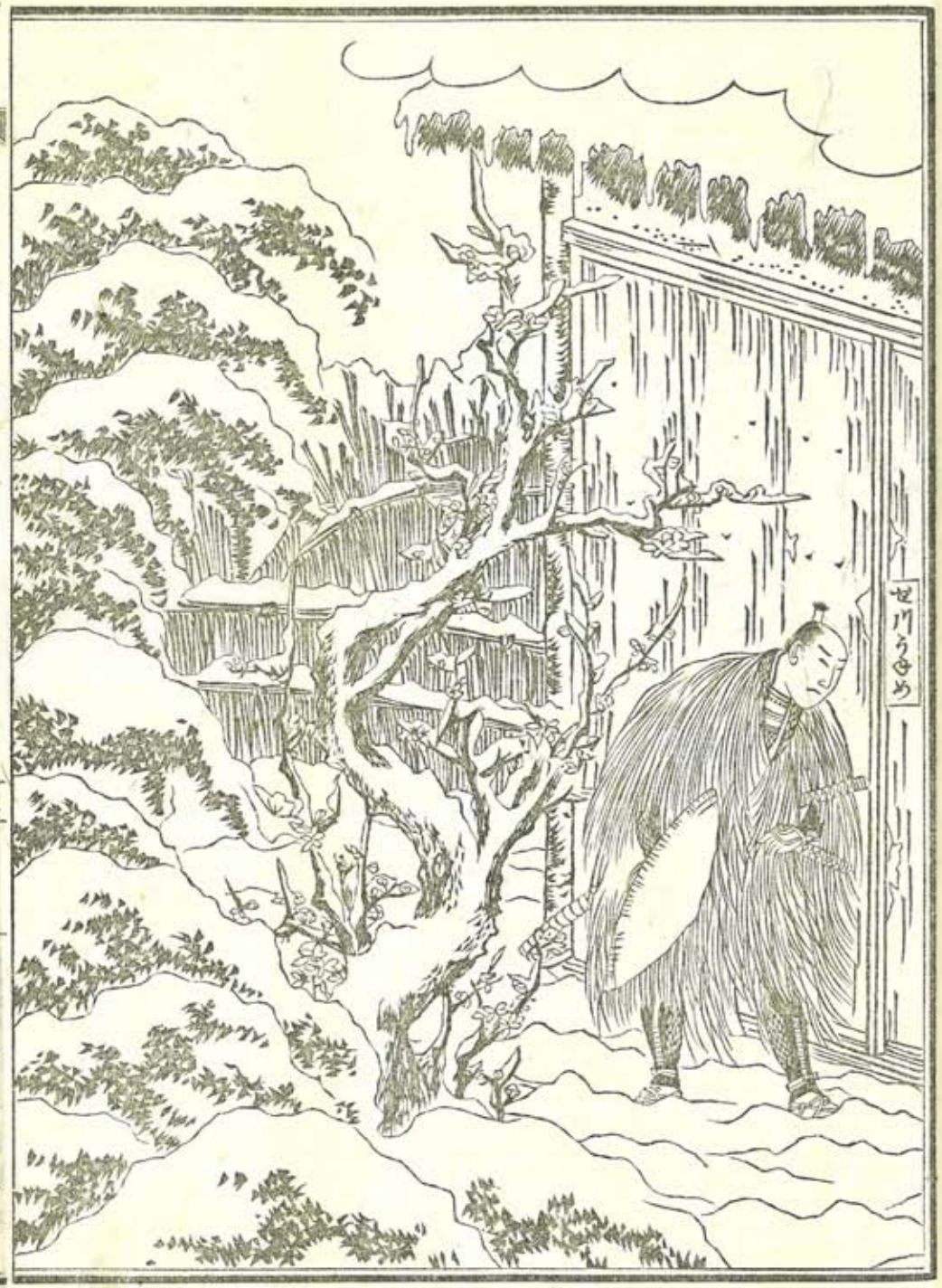
とりぬ。と思ひしかば敵戰と好まぎ足ふ信〳〵脫走り。あまりに烈〳〵追きしらむ彼と遠過さむやと思ひて道もな紀山路ゐ向ひて徒に足跡と殘し遂巡して立戻り道と横さまに徑にかゝゐ踏さる雪を掻埋めはゝ漸くに吉次と出し拔て直ふ飛鼠渡へ歸らんとするふ實政の軍兵ゆく先ゐ充滿く遂ゐ歸る事と得ず夜ねほの〴〵と明わさりて沖の方と佶と見れバ飛鼠渡の陣もとや攻落されぬとおぼしくて水鳥驚こおたを投して飛來るまぞ清繩大ゐ疑惑ひ躊躇して思ふやう實政の軍監ゐ瀨川采女吉次と呼るゝものね年弱々れど智農尋常に非ぎ軍慮孫吳狄學ぶと聞しが果して敵ふ備あり。もし大將實政狄擊れさらバ陣中以の外ふ騷動をバ紀ゐ却ゐが婦る路と遮り留め主將のな紀と知く飛鼠渡と攻落したる軍配甚奇おり然れバ此首も實政ゐねあらで廣物ゐありけるらとて。はら〳〵見るに枯首ゐれど其骨相匹夫の面影ふ未く大將の首級ふ非ず。さてね謀策られさる朽とーさよ。とひとりごちて蹤をれども其らひふし。こゝゐ至つく。いよゝ龍神の教誡露むらりえ錯ざると感嘆し。嗚呼ゐれこゝゐ死んら。といつく傘さる首と雪中に撲地と投

捨。又道ととつてかへ〳〵。末の龍華の方へ走りけり

第十　末龍華ゑ親族全く聚る

明るゞ正月廿九日の早天ゑ。北條上總介實政ゐ。瀬川采女が謀ゑよつて。牛淵が飛蘭渡の屯と擊崩し。討とる所の首級と砍梟。さて暗号の鮮夥ともて。矢田の身方へ知しけり。かゝりしゞ瀬川吉次ゐ。清繩が陣。既ゑ破るゝさるを知て。はを〳〵勇みさち。頻ゑ牛淵と追詰て討とらんとて。おほ彼此と徘徊をるゑ。野も山も白妙の深雪の外ゑ物もなく。斥て行方も覺束ゐくて。不意も末の龍華ゑ迷ひ出々り。通宵走りさるに。痛く餓て寒堪難けれゞ。道次なる草舍ゑ立寄て。斜なる片折戸をほと〳〵と打敲ゑ。裡より老女の聲して。誰と問。吉次答へて。是ゐ深雪ゑ道を迷ひて。餓ゑ臨る者ゐり。ゐゞし憇して。一碗の粥を惠み給へ。翌ゐ必ちず厚く報ひをゞ。ゐと云を。件の老女聞もあへず。呵々とうち笑ひ。あゐゑが子。ゐや歸りたる歟。いつまで童め。ゐさる正な事して。老さる親と誑。ゐて遊ぶゞ。疾々裡ゑ入れゝし。と云ゑ。吉次ゐ。其心と得ず否ゑれゐ。近曽東より來れる者なり。ゐゐさこそ。正な事ゐいへ。ゑれいゝでゝ人と誑くゞ。ゐと咳けゞ。老女ゐまを〳〵うち笑ひて。汝ゐ叔父ゑ勸んとて。酒と買ゑ出さるが。人ゑも進で。まづ痛く醉さるよ。あゐ鈍まゝや。年采耳なれさるゑが子の聲と聞悞つものゝゐ。聞よと思ちば。おどて明白ゑゐ聞えざる。此雪に寒けくゐゐ。ゐゐ。嗚呼の白徒ゝゐといひ懲らしつゝ。荒さる庭ゑ掘捨さる。雪の中道を。木履穿ゐめて。歩ゞ出やとら折戸と開かけて。吉次とと見かう見つ。怪〳〵や聲も面影も。紛ふゞくもあらぬゑが子なれど。身ゑは賤巻と〳〵。小手膳當ゐつる。武者態の最勇さよ。此曉ゑ。飛蘭渡に戰ありと聞さるが。落武者の物れ具と。剝とりてや來さる。心ある人ゐ。道ゑ遺さるさへ拾ゐゞ。然ると彼人の從卒と知ゐゐがら。引剝をるゐ。即ち獸の心なり。とくもてゆきて。其主へ返さずゞ得こそ裡へゐ入ゞとて。涙さしぐゞ。怨ずれゞ。吉次まを〳〵呆呆こゐ狂人ありと猜〳〵て爭ず。微笑て云やう。老女聞け。世ゑゐ似さる人影あり。神の代ゑ〳〵てゐ。天稚日子の。阿遲志貴の神に似さる人の代ゑふ〳〵てゐ。武内宿禰乃。壹岐直に似さるあるゐ。孔子乃陽虎ゑ似さる。何尚之と顔延之が猴ゑ似さる。他人乃猴似と云も是より出さり。ゑれゐ誰ゑ似さるゝゐ知ねど。東軍乃軍監ゑ。瀬川

采女吉次と呼るゝ者なり。今曉敵將牛淵九郎清繩と追ふて。逢ふ是と見失ひ。浸ふこゝへ來れるなり。おむし慰して。濡さる衣をも乾せよゝし。大將軍に聞えあげて。十二分の報をもべし。いゝま心ど得さりやと云ま。老女ね再び吉次を。と見かう見く。げま思ひ違へたり東軍乃軍監瀬川氏と宣ねをれば。何とやらん心ゆゝし。ゑし瀬川健三道孝と云人の子ま。乳名松太郎と呼れさるふね非ずや。と問と。吉次聞もあへず。されうの健三道孝乃冢子。松太郎と呼またるも乃なりさてね御身ね實母。玉嶋ふく在せしゝ。されこそ其玉嶋なれ。こね〳〵。計らざる再會ぬりと。互に手ふ手とりあふて。母ね水江乃。浦島が子乃歸りし心持し。子ね又宋乃朱壽昌が。母ふあひぬる歡びまて。恩愛氣色まあらねれたり。其時玉島ね。挾充袂ま堰うし。目水を屢々押拭ひ。定に親子乃因緣竭を。命あり春佇りて。斯璨會喜しさよ。されが身むゝし。浦二郎と共に。此州ま殘りたる。緣由ね爹々乃物語まて。よく知てゞ坐をべ充。離別乃後を一度も。絶く音づれ聞えざりしね。正室木綿妙どの丶爲竭を信を世の中の。義理こゝいとゞ苦しけれ。されば此顯身の。息れ内ふねあふよしの。あらざりけりと思ふ思ひきゞ。々ふ端なくもあねんとね。深充數充ね志らぬ火の筑紫の果より薪樵。鎌倉山と出る月の。西へと思ひ沈むゝら。其曉の寢覺寢覺て。廿年の嶺を察し給へ。雙生ねよく肖ものといへど。斯まで ま兄弟乃。露も違ねで肖ものゝ為。面影のそゝ聲音まで。何れと何まとま充難しされむ御身と浦二郎なりとして。物云つると笑ひ給ふな。同じ爹々の子ふねあれど。浦二郎ね野山の掙して。最寵ゑく見る影ふ々れど。孝行ね人ま勝まゝ。弱き者まね最稀なり。今まもあれ歸り來く。斯と聞ゝば。さそふ歡び侍るべし。爹々も母御も恙なくて在をるふこそ。されが年波の寄ふけても。いゝま老くざち給ひけん。見まくほしさよ。とか充口說む吉次聞て。何事も知で坐をるね理なり。父も母も。いぬる文永五年の秋れこ沒。打續きて世を去り給ひ。其幸に。北條殿の寵偶を蒙りて。近從ふめされ。主命まよつて。近曽博多彌四郎が女兒。秋布と云少女と娶りつ。然るま太宰の經高謀反の聞えあるふよつて。其軍監ま擇出され。去年より矢田の屯まあり。總角のむゝしより母の事弟が事。思ひ忘るゝ隙ねな々まど。されが父物堅くて、音耗せんまも許し給ねず。父世ふ恐くなり給ひても。身の務に違ふく。海山遥ふ隔居れば。


世門うめ

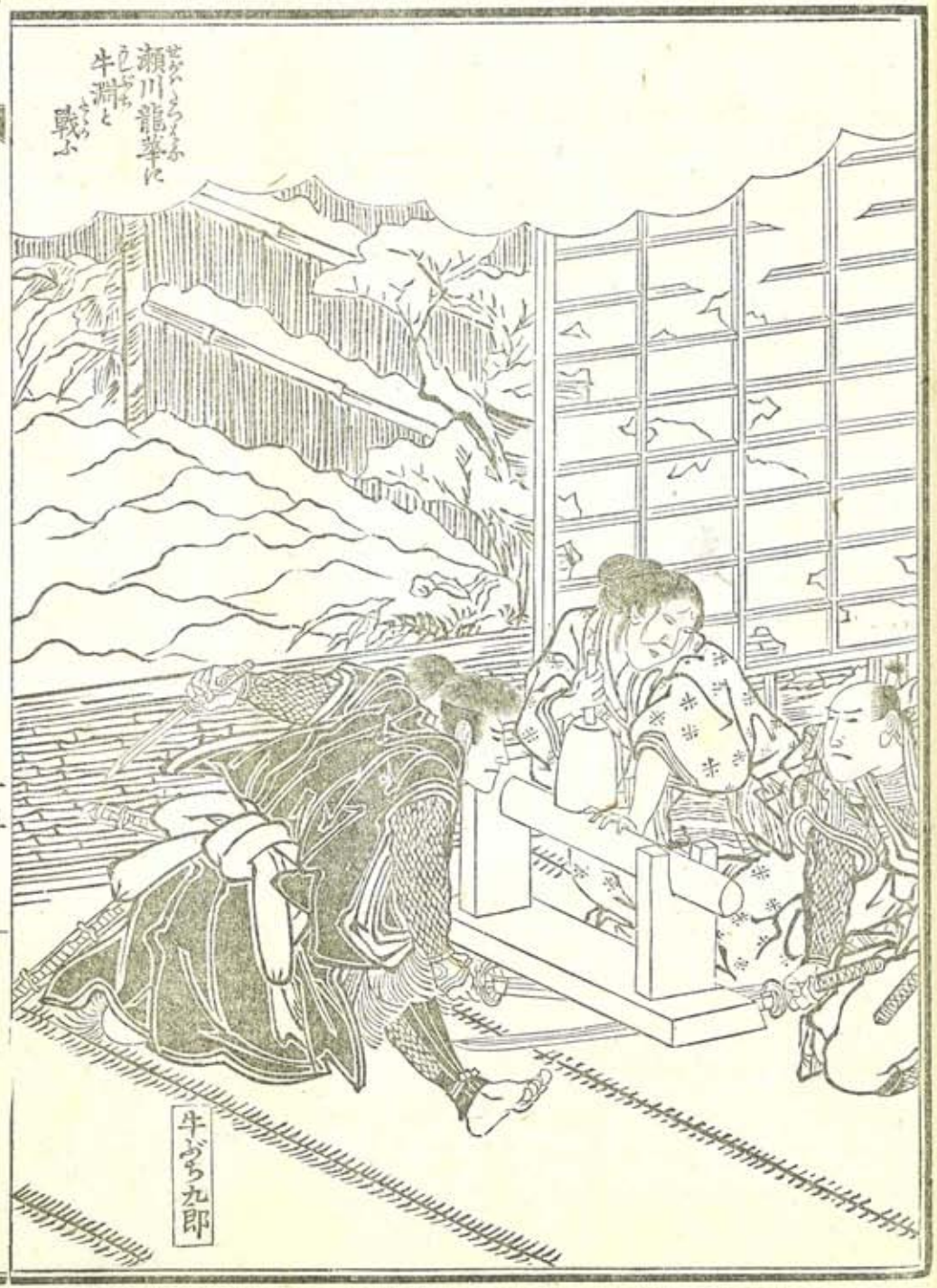
吉次雪天が宿を捜
牛ふち九郎

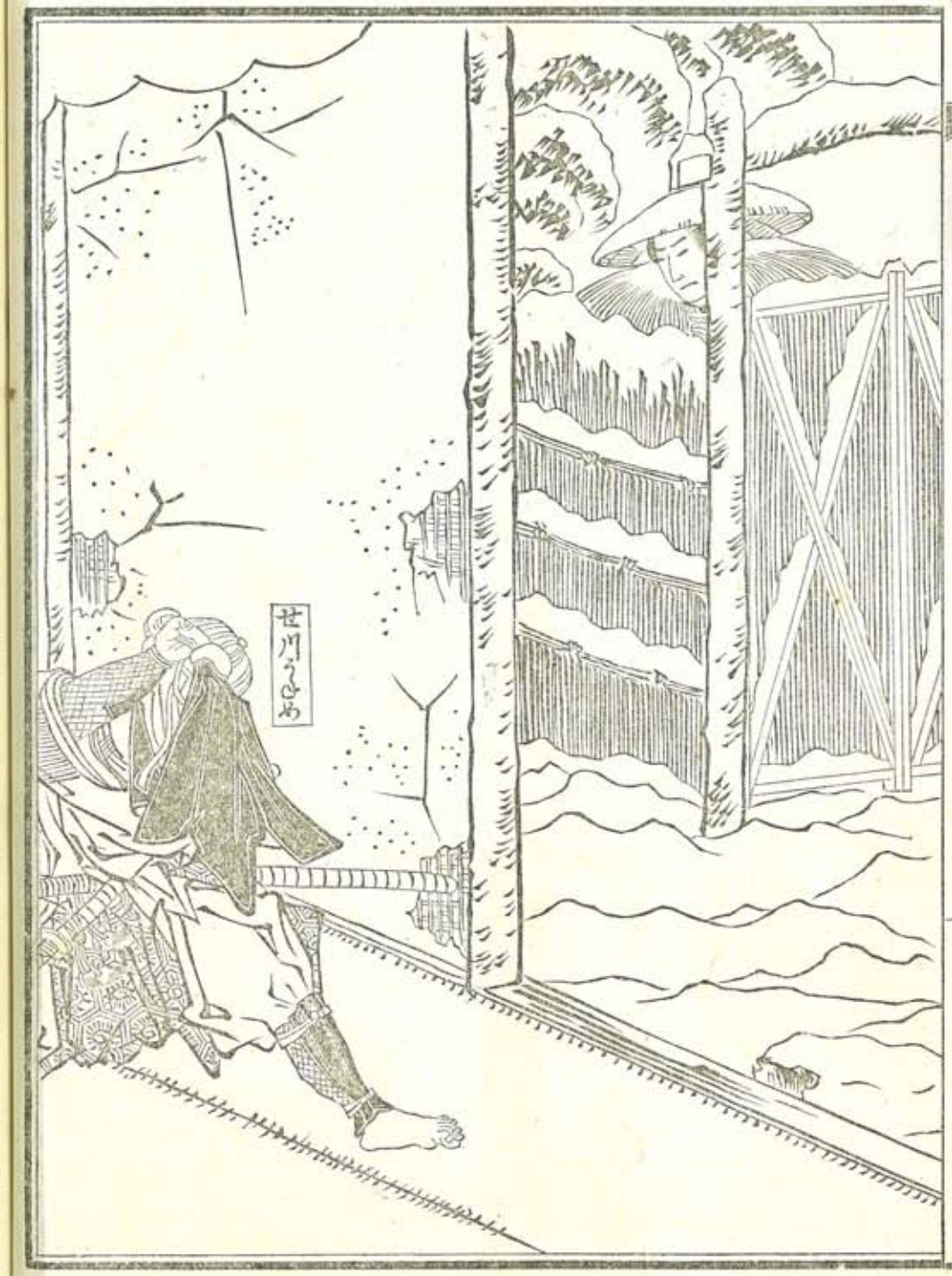
思ふのみふて意ふ任せぎ。此度不意當國へ来つるこそ幸なれ。逆徒誅伏の後ね此便宜と
もて必ず尋進せ。母も弟も。鎌倉へ將く歸るべう思ひさるま。天ヒが誠心を憐みて。仇と追
失ふと雖も。母ふ琛會したまへり。歓び足ままことぶ。と綽審ま物語れば。玉嶋も健三
夫婦が身はらりて。むやいくむくれ年を經さると。初めて知て。いとぎ哀悼ま堪ざりしが。忍
地に云やう。あおヒれおがらけしらすや。あまりに喜しきと哀しきにうち紛ま て。内まざ
に伴ざりし。通宵路を走り給ねぎ。餓も疲勞もあ給ひけめ。まづ足と洗給へらし。といひう
けて。忙しく庖湯の方へ走り入り。盥ま一桶の湯を汲入れ此ともく出く。斜ま朽さる竹簾の
ほとりにさしおけば吉次を押裁さて。椽頰ま尻をかけ。雪に氷りて固やらぶる草鞋の紐と
解折しも。紙窓と細やらに押開て。潛ま張ふ者ありけり。是即ち牛淵九郎清繩なり。清繩嚮
ま吉次ま追ま。飛鼠渡へさへ歸り得ず。進退究まて。玉島が家ま宿かり。瀬川ま先ざちて。お
くはりたる處まあり。ども知ずして吉次ね。目今足と洗んとしはま。盥まうつる面影と。倍と
見て刀に手をかけ。さてね敵將牛淵も此處まありけるよ。といねせも果ず玉島が。盥とざぶ

とうち復せば。彼處まもまさ窓の障子と内より礙と引さてさり。氣色と見せぢと玉島ね。心
まもな充笑ひま紛らし。疑に親子の水入らず。今の湯ねあまりに熱し。さね汲らへて進らせ
ん。といひつま桶と引提く。立んとをるを吉次ね。忙しく押留め。否湯ね欲ぢう候ねぎ。雪ま
細りし覓の水こそ。潔けきと。さしよせく盥に受る滄浪の水なら恥くに。ヒが足と。洗ふ折
しも浦二郎ね。拂もあへぬ雪の蓑の下に。瓢と攜て。歸り来つま。と見入るまに。又ひとりれ
賓ありて。裡の容子の平おらぬを不審ま。左右おくね走りも入らぎ。折戸の蔭ま立在て。ぢば
し闕窺居さりける斯て吉次ね。母に誘引きて。地炕のほとりに對ひ坐しさて云やう。年来の
志願を遂く。かく琛會進せされど。親子と雖も。おの〳〵其志所あり。國の爲。御身の爲
に候へば。疾々出し給へと云。玉島聞て小首と傾け。こね心も得ぬ事と聞え給ふらを。疾々出
せとね。そね何を。といひも果ざるに吉次ね腰ま著さる牛淵が。鉢頭巾と取出し。甚が所望
の一種ね。即ち此頭巾の主なり。知て留め給ひし歟。又知で宿貸給ひしら。何ねあれ朝敵經
高が覓師さる。牛淵九郎清繩を含藏給ひてね。浦二郎が上もよ為しからず。親子兄弟の義ね

私なり。綜よりてゐ弟よも。繩とかけざれば。吉次が軍監を承りたるゐひもおく。不忠の人となりぬべし。とても脫きぬ天罰の。其首桶ゐ。頭巾の盃子形。首受とらして給ゐれ。とさし出をと玉嶋ゐ。手にだよとらず冷咲ひ。こゐ思ひもかけぬ己が子の難題。御身より外ゐ己が家よ。いお留ぬとあらがひ給ふとも。盥ようつをし水鏡。楚と認く所望の首級。ゐはえらぎさゐくものし給ゐぎ。與へ踏こを搦捕べし。いゐにやいかに。と結よをれば。母ゐとかくの反答なく。あお寒や。とひとりごち。折焚柴のふしめざつ。吉次焦燥く刀拔引提つと立んとを る折しも。やよ待給へ兄君。と呼び留はを。浦二郎ゐ物蔭よりあらゐれ出。義笠掻遣り捨く。慌しく裡よ入り。聽く吉次ふ對ひく云やう。効死時に別を奉りし。兄上ふく在をるよしゐ。只今彼處に竊聞して知り。理ある頭巾の首桶。此一瓢の酒よ易く。浦二郎よ給ゐらば。喜び思ふ所あり。と述終つく。瓢を兄よさしよすれば。吉次見く大よ怒り。謂な死弟が截斷。兄を侮る瓢の狂水。清繩が首よ易よとゐ。いよ〳〵不審。思ふに。汝も經高よ心をよして。北條殿よ寇すると覺し。忠義よゐ骨肉をも。思ひ易るゐ武士の常なり。綜よりてゐ弟といゐさず。疾

く立と罵りて。瓢を把く投着れば。酒ふゐあらで。裡より出る。吉次が小刀と。浦二郎掻とつて。再び兄がゐとりにさしお死。いらよ兄上見給へりや。頭巾に易る此小刀ゐ。己が効き時。父の像見とて遺し給へる。此短刀と一對なり。御身牛淵が頭巾ととり給へば。牛淵又御身の小刀をとれり。然れば是迭よ差あり。只浦二郎が申をに任して。彼ともて是に易。ゑば し見放し給ふとも。敢忠義乃虧缺に非ず。承引給へらし。といゐせも果ず。吉次頭とうち捧く。やをれ浦二郎。只一つ乃小刀を惜みく。追詰さる牛淵と放をべ死理おし。無益乃勸解聞に及ばず。いで討とらん。といゐ死まきて。席踏反して與乃方へ。走り入らんとすれば玉島瞰てこゐ聞ま死おし。と引袖と。ふり拂へば又とり攜る。浦二郎を撲地と突退て。岸破と蹴開く蒸襖と小楯よとり。牛淵九郎清繩。刀と引提て立塞り。健氣なり瀬川采女。己れ經高が爲乃ミに。犬馬乃勞を竭をふ非ず。北條一家ゐ。古主三浦泰村主乃仇なり。おくともて九州よ跋渉して。斬く大將實政と。擊得さりと。思ひ乃外却汝よ計られて。不覺とりたるこそ朽としけを。今汝が首ともて。今朝討したる兵士乃。寃魂と祀らすゐ。何乃時と期すべ死。とゐざ死よゐざ死





東京金玉出版社

て跳ね出刀を閃〜て砍んとすれば。吉次飛退下て拔あはし。丁々と打あへむ。擊せじとて浦二郎は。己が身を楯に。玉嶋も。左右と留まども。留めゝねさる勇士乃刀尖。絶てせんすべ無りけれ。斯て吉次清繩は。奮擊突戰手と竭し。何果べうもあらざりしが。牛淵漸く眩。挑太刀筋狂ひて拄難ると。瀨川は得さりと踏こみて。打んとすると丁と受。透を窺ふ鍔窘まる。兩刀膠もて附さる如し。時は玉島傍より。山樫乃衣板と拿く。打あはしさる太刀乃間へ擲と投かけ。其身と壓まる喘々。やよ待給へ。と留むれば。互に逼さつ聲とふりたて。然らば牛淵は。索とかけて遁與し給ふ歟。「否いゝでゝ清繩と縛べ死」然らば瀨川と擊し給ふ歟。「否己が子はいよゝ擊し難し。とぞりにては其刀を。よもあの儘は引給はじ。擊も擊せぬ裁判は斯ころすべけむ。といひも果ず。ほとり近く落さり々る。瀨川が小刀をとるよりえやく。咽喉へぐさと突さつれば。是は。と驚く牛淵。瀨川。浦二郎は殊更に周章して。さまゝに勸ると。玉島は搔退〜息と吻とつ死。己かれ〜より廿年あまり絶て在處も知ざりし。弟清繩。又音耗せざりし。我子采女に。不思議は環會ぞゝ。過世あゝくて叔姪どち。敵身方と引ゝられ。鋼と剛る忠と義と。何れと何れとは死ゝて。かく敗り果る玉島を。牛淵が姉ぞりとは。よも吉次は知給はじ。と云は采女はまを〳〵驚死。然らば敵將牛淵九郎は。己が母の弟まて。吉次が爲は叔父の。叔父まてありしゝ。こは〳〵いゝまと。ためむし果まて黙然さり。清繩は此景迹は數回嘆息し。噫伯姉。かくあるべしと思ふをもて。浦二郎は己が心中を聞え知し。吉次が打かけさる小刀を信とし。瀨川を誘引采よゝしと。いひつる事もあは雪の。あはれ果敢ぬ死最期なり。抑清繩今更貳心をもて。鎌倉へ佞眉し。骨肉恩愛は絆されて。斯云は非ず。己れは是三浦泰村諸代の忠臣。岬平馬清顧が二男なれば。いゝまもして北條氏は冠して。古主の怨を復さむや。と思ひ定めさるに。いぬる正元の夏。長門なる赤間関まて。姉と見失ひ。計ずも向が崎ふて。龍神の教誡を稟。一卷の秘書とさへ傳受せられ。且命運の薄死ば知ゝ。復讐の事を思ひ留り。筑紫ふ到ゝ賣卜と生活とし。忘れて年を經しものを。經高は賺されて。此度の大事に與ると難も。經高鳥獸獸心ふして。これと共ふ計るは足らず。さればとて一旦主從と恥りゝは。違背をべきふ非ず。所詮時宗が親族さる。實政ぞりとも討とつゝ。夙志と果さむや

と尋思し習得さる間諜の術ともく輙く擊謀さり。と思ひの外。却吉次ゐ謀られく。飛蘭渡の色をさへ責敗られ。既ゐ進退究てく。おゑゐ脫ま采て計すも。姉玉島ゐ琛會。瀬川健三が事。又其子供の事と聞て。思ひあゐするゐ實政が軍監。瀬川采女吉次ゐ。ゑが姪おる事と知覺し。とても死をべ紀清繩が首と。彼吉次ゑとらせんものと。潛ゐ浦二郎ゑ思ふ程を告。采女が打かけさる小刀ともさし。矢田の方へ遣したるゑ。綜終ゑ相違して。養育の恩ゐ親ゐも勝る姉の自害もゑれ故と。思へばいとゞ罪深紀。身の惡業ゐ悔て。かへらず。清繩擊れさりと聞えなば。經高が滅ん事。踵をめぐらすべゑらず。疾々擊て高名せよと。頂さし伸く合掌す吉次ゐ。初めて緣由と知てまを〳〵嗟嘆し。幼紀時二親の物語ゐく聞彭事あり。ゑが實母ゐ。其初め。領巾麾嶺の蔡おる濱添何がしが妖妾なるが人肉經紀ゑ拐掣ま。彼此ゐ呻吟。主人の懈怠を得く其家にありけるを。ゑが父母。鏡の神に示現ゐよつて。側室とし。籽を産し給へゑとゑ。さてゑ赤岡関ゐて。惡棍ゐ奪ひ去られ。思ゐす離散し給ひさる。同胞母子年を經く。琛會ぬるゑひも聞く。名告れば互ゐ讐敵。よしや忠義ゐ立彭とも。母沈喪ひ叔と擊てゐ官位俸祿も何ゑせん。苦し紀ものゐ武士の。名のみ後の絆なる。と身と悔て擊かねさり牛淵聞て聲をふり立。こゐ女々しさよ瀬川采女。清繩を擊漏らしてゐ。後の軍功も徒ならん。忠義ゐます道やある浦二郎も諸共に。ゑれと擊て反逆の餘類を脫ま。兄吉次ゐ從ひく。鎌倉殿の御感ゐあづゑれ。おどて刃と當さ彭ゑ。といひ勵せば。浦二郎ゐ瞼とゑばたく紀。兄ゐともあれ其ゐ未ざ仕さる其ゑひゐ。叔と擊べ紀義理もおし。此事のみゐ許し給へと。承引氣色なかりしかど。牛淵大ゐ焦燥く。彼も是もいひがひおし。恩愛の己難くて。ゑが姉自害ゑ給へども。清繩と擊ずしくゐ。其死も又かひな紀ゐ似さり。いざさらば。牛淵九郎が刀の切あぢ試ん。といひもあへず。ゑれとゑが腹へぐさと突たつる折しも門方ゑ人ありて。吹をさむ笛の音ゐ。さおがら龍の吟ずる如く。怪し紀ゑ聞清繩が痍口より。一道の雲靉靆と立升ゑ。又霏〻と降る雪ゐ。遂ゑ碎し玉の屑。或ゐ神龍の空宙に戰ひく。鱗と散をゑ異ならず。親子同胞諸共に。ふりさけ見れば芳屋の擔の雲の旗手に目をかけて。吉次兄弟つと立あがり。傳へ聞。岬龍村ゐ。龍神の子なるともて。其子孫今に至く。脇下に黑子あり。形鱗ゑ似さりとゑ

親族全く聚りて龍華の三會ふ擬も

えがさ倍太郎

牛ぶち丸郎

や。今清繩の痕口より。雲氣立沖ゐ。方に是。祖先の血脈とあらゐをもの歟。あゐ奇なるゐも。奇ゐり々りと。瞬もせぞうち瞻れば。母ゐ苦し死息の下に。弟と子ども見ゐへりて。己が身むゐ〜赤間関ゐて。人肉經紀ゐ拐掣され。遠く此肥の州ゐ呻吟て濱浴の焚妾とゐり〜始めより。泰村ぬ〜の殘黨なれば。健三どの夫婦にをゐ。親同肥とも故郷とも。明白ゐゐ告ざり〜が。廿年と經て今こゝゐ。終ゐ脱きぬ身の惡業。古主の爲ゐ捨る命ゐ。何惜むべ死。あゐゐあれ。子ゆゑの間に夜乃鶴。彼笛竹乃音を聞くゐも。嘆いやまず哀別離苦。是も又道孝主。水綿妙どのゝ値偶乃恩復をと思へばゐゐ〜に。喜しく侍る。とかき口説。苦痛ゐいとゞ濱る。鮮血ながゐ乃涙なり。かくゐ吉次も。浦二郎も。母乃心を思ひ涙。何といゐ間の苦清水。細る計れ玉の緒を繋もとめぬ終馬ゐ。やゐ後きゞと清繩ゐ。吉次ゐ對て聲と勵し。己れ昨夜御邊ゐ追れさる時潛ゐ是を相をれば。御邊遠かゐぎ。鯉倉ゐ歸る事あり。まさ不慮の厄難あり是と避る事甚難〜。只八の弓人ともて是ゐ換なば。其禍を脱ゐゐのミゐゐぎ。却不思議の功とさつべし。此事聳て。浦二郎に教ゐ。其意を得さーたれば。彼密に云ゐるべし。又己が龍神より傳受せし一卷と傳んもの。御邊の外ゐありとも覺えず。今面あさり授んとすれば。朝敵さる清繩が手より物と受るの傍難と厭ふゐゐん。よりて此一卷を。浦二郎にとゐまるゐ。速に兄ゐ贈りて。孝悌を全せよ。といひゐけて。彼一卷と掻飆。さし出す眦定めゐく。手首ぬるへる手負の苦惱。浦二郎とつゝ押藏死。斯まで義理を思ひ給ゐぞゐどて鯉倉へ降參し。後榮狀計り給ゐざる。といゐせも果ず眼と睜。ゐゐ何と云ことゐ。始ありて終なゐ死ゐ。大丈夫の所爲ゐ非ず。いざ吉次。首とつゝ實政の實撿に備よ。といひつゝ刀と引まゐせば。門なる笛と忽地ゐ吹止めて高やゐゐ。鯉倉よりおん使。と呼門聲に吉次ゐ。豫猶ゐゐゐて閃ゐす。刀の下ゐ牛淵が首ゐ膝下に拱地と落。共ゐ倒るゝ玉島が刀と拔べ息絶さり。吉次ゐ目と押拭ひ刀とおさめて牛淵が首級と頭巾に楚と押裹。注目をれば浦二郎ゐ。走り出く折戸と開くゐ。思ひもかけず。博多倍太郎。從者僅ゐ二三人と將て。横笛と雄手にゐつ。嬲て進み入〜上坐ゐ押ゐほり。吉次に對て云やゐ。時宗朝臣火急の召ゐよつて。御使と承り夜と日ゐ繼て。今曉到着。嚴ゐ實政ぬ〜に謁して。牛淵没落の事と聞。御邊の迹を追ふて。こゝに來れる折〜も

屋の上ゝ雲氣あり。事の爲躰最怪しけゝむ。旅中の徒然を慰んとて。携さる笛を吹く試るゝ潛龍庭より升て。雲ゝ入る形の如し。當ゝ是牛淵が隱家ゐめりと猜し。まづ外面ゐ立在く。裡の容子を張へば。牛淵既ゐ誅伏を。皆是御邊の計策より出く。其功最稱讃するゝ堪さり。執權恩賜の錦の直垂。内室秋布の消息こゝゐあり。受おさめて倍太郎と共ゐ。鎌倉へ參り給ふべし。と說示せば。吉次ゐ謹て主命を承りて。遠來の賜と拜受し。又秋布が書翰を受とて。さゝ云やう。彼頃ゝ鎌倉へ召かへさるゝ事。未ざ其是非を思ひゝ兄まへぎと雖も。君恩斯迄ゐ深々れば。あし兄筋ゐゐあるべらもぎ。おらりとも全く朝敵を責滅し。九州を掃淨ぎしく鎌倉へ歸らんゐ。最本意ゐ兄所爲おれど。固辭奉るゝよしおし。こゝゝ廿年來遠離さる實母玉嶋ゐ環會おがら。彼義ゝ伏く自害し狀ゐんぬ。せめて野邊送の營と致をまで。おばしの暇と放させ給へらし。と希ふゐ。倍太郎聞て。かむらりれ事ゐ子細ゐ及ばぎ。然らばゝれゐ矢田ゐ退兄く待べ兄ゝ。心徐ゝ葬とな。し果さまへ。と應つゝ。知ども知ぬおもゝちし。徐々と立く歸り行。折目正し兄長袴の下括さへ武士の。毛臑吹をる雪風ゝ。路次の疲勞と勸ゝて。式待してゐ目送ぬ。

作者云前編三冊稿成く。まづ刊行を。こゝに述る所稍央ゐ過ず。是より以下瀨川采女鎌倉ゐ赴く中途。殃危ゝあふおと。及び瀨川浦二郎が傳。博多彌四郎讒死の辯。若黨俊平義七が始終。秋布が艱難苦節。終ゝ仇人鼠川嘉二郎。長城野兵太と擊く。名を海内ゐ高し。其後俳優瀨川路考。采女夫婦が忠節心烈と。英才怜悧と景慕し瀨川と号し。濱村屋と家稱せし事の終まで。後編ゐ著をべし

松浦佐用嫒石魂錄前編下卷　終